

えらばず

きらわす

みすてず

竹中 智秀

『2025年難波別院カレンダー』8月のことば

掲示板のことば

このお言葉は、阿弥陀仏の撰取不捨のお心を和らげて表現されたものです。

思い出しますのは、三男の出産の時、産道で止まってしまい、一時心音が停止するということがありました。先生たちが慌ただしく動く中、私はどうする事もできず、ただひたすらに無事を祈りました。その後、心音が聞こえはじめ、産声を聞いた時はほっとして涙があふれていました。

えらばず、きらわす、自らの境遇をそのまま受け入れ誕生してくれた、そのいのちに出遇った時、私自身もきつとこうして生まれ、そんないのちを今、生きているのだと「いのちの根」を教えられた

ようでした。

しかし、思えば日頃はそのことを感じる間もなく過ぎていきます。周りの支えや、育てられてきたことを忘れて傲慢になったり、思い通りにいかない時には「私の人生何のために…」と空しく感じてしまうこともあります。そのように「いのちの根」を忘れて、自分の思いに執られて苦悩する私たちだからこそ、先達はお念仏によって阿弥陀のいのちの声を聞き、今を大切にいただいてこられたのでしょうか。

阿弥陀仏の撰取不捨、全ての人をおさめ取って決して捨てないというお心とは、自分で自分を見捨てることなど決してできない、そんな私に育てて下さるはたらきだと感じています。(大阪教区教化センター)

今月のことば

宝林宝樹微妙音ほうりんほうじゅのみみょうおん

自然清和の伎楽じねんしょうわのぎがくにて

哀婉雅亮あいえんがりょうすぐれたり

清浄楽じやうじやうがくを帰命きみちうせよ

昔に聞いた音楽が流れてくると、過去の思い出がふっと蘇ることがあります。わたしの場合、6年前に亡くなった父親がクラシック好きでしたので、年末などに交響曲が聞こえてくると懐かしい気持ちになります。

では、阿弥陀仏の浄土ではどんな音楽が流れているのでしょうか。ご和讃を意識してみます。

「浄土にある宝樹林からは、妙なる音楽が発せられています。自然に調和し、

まるで巧みな演奏家が奏でているようです。阿弥陀仏の大悲から生まれる、まっすぐに響き澄みきった音楽の、なんとすぐれていることでしょうか。どうか、清らかな音楽がこだまする阿弥陀仏の浄土に帰命してください。」

浄土は光明の世界と言われますが、このご和讃からは、浄土は音楽の世界でもあることが教えられます。その音色は「哀婉雅亮あいえんがりょう」と示されます。この言葉に親鸞聖人は「あはれに澄み、正しく冴えたり」と注釈しておられます。注目されることは「あはれに（哀）」です。浄土の音楽は、単に優美な、

心地の良い音楽ではないのです。それは、移ろいやすい世間の価値観に埋没し、確かな方向性を持たないままに生きているわたしたちを哀れむ、阿弥陀仏の大悲の心から発せられているとかがえます。

そうであるならば、その音楽は彼岸の浄土にとどまるものではないはずです。お釈迦様は「その声、流布して諸仏の国に遍ず。その声を聞けば：不退転ふたいてんに住せん」とお説きになっておられます。浄土の音楽は、わたしたちの世界にまで至り、それを聞く者に、生きるうえでの確かな方向性（不退転）を与えると言われるのです。その音楽の聞こえてくる方向が、歩むべき道になるからでしょう。きっと

親鸞聖人は、師である法然上人の「南無阿弥陀仏」の念仏に、また流罪の地で出会われた人々の念仏に、浄土の音楽を聞いていかれたと思います。

煩惱に覆われているわたしたちにとって、浄土は見ることでできない世界です。しかし、そのまだ見ぬ世界は、聞くことのできる世界、すでに聞かされていた世界でもあります。クラシックに素養のないわたしにとって、父の残した大量のクラシックの音源は、まさに宝の持ち腐れですが、南無阿弥陀仏だけは聞いていきたいと思うことです。（千賀 貴信）

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』（初版）482頁

（第二版）576頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

（青本）121頁

「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「お盆」を

大切にしましょう



「迷う自分、案じられる自分」

柏原市 易往寺 怡土 弘樹
いと ひろき

「お盆」というと皆様はどのようなイメージを持たれるでしょうか。提灯

ります。では、私たち真宗門徒はお盆をどのように頂くのでしょうか。

や精霊馬、お膳やお菓子を用意して迎え火を焚いて、ご先祖様をお迎えする。そして、送り火を焚いてお帰り頂く。夏の風物詩と言える仏事というのが一般的受け止めではないでしょうか。そこには亡

お盆とは『盂蘭盆経』という經典の説話を元にした「盂蘭盆会」という仏事の略称です。中国から日本に伝来し、日本の先祖信仰と融合して定着したとされています。

くなられたご先祖を偲び、供養しようという思いが込められているのでしょうか。しかし、真宗ではお盆の受け止めが少し異な

『盂蘭盆経』の内容は、釈尊在世のインドに神通力に優れた仏弟子の目蓮がおりました。安居（雨季に集団で行われる修行）の途中、亡き母の姿を思

い描いたところ、餓鬼道で逆さ吊りの苦しみ（倒懸）を受けているのを見つけ、驚き嘆いた目蓮は釈尊に母を救う方法を尋ねました。すると釈尊は母親だけではなく、全ての人を救うことを願い、安居を共にする修行僧へ施しをするように教えられました。目蓮はその通り実践し、その功德が届き母は救われたということとです。そもそも目蓮の母が餓鬼道に堕ちたのは、その昔、目蓮を溺愛するあまり、施しを求めた修行僧に対し「全て目蓮のためのものだ」と求めを拒否したことによるとされています。

近しい人を大切にしたい、救いたいという思いは尊いことですが、一方

で私的な欲求としての思いは迷いを深めることにもなります。その事実に気付かせ救わんと立ち上がった下さったのが阿弥陀仏であり、その国に生まれた諸仏なのです。ご先祖が迷いの世界から戻って来られるので供養しようとするのではなく、迷いながら生きているのは私自身なのです。ご先祖は諸仏となつてその事を明らかにしようとして願いをかけて案じて下さっているのです。

真宗門徒として、ご先祖に思いをはせ普段忙しさに追われて振り返ることのできない自分にお念仏の教えを通して出あつてゆく、そのような機会として「お盆」を大切にしていきたいものです。

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈241〉

